

日本とカナダの外交関係はここ二、三年、新段階を迎えたと評している位、緊密さを増している。「遠い国」が急速に「近い国」になりつつある。そのため、政府でも企業でも、資源国カナダにこれまで以上の選り抜きの人材を投入し始めている。

それとともに、ちよつとしたカナダ悲話が生まれつつある。日本企業の進出の多いトロントや、モントリオール、バンクーバーなどで日本から単身赴任する「カナチオン」（カナダチオンガの略）が目立ってふえているのだ。ビジネスマンばかりではない。大学に留学する日本人先生や政府の駐在員の間にも「カナチオン」が少なくない。

例えばトロントのAさん。「それはわびしいのですよ。夕方帰宅しても誰も話し相手がない。読書やテレビ、ステレオでウイスキーをやりながら過ごすのですが、滞在が長くなるほどヤルセなさがつつてきます。妻子がいないので、カナダ人と交遊する家庭パーティーすら開けません」と卒直に気持を打ち明ける。昼間、カナダの大都会で外車を飛ばすAさんの心の奥には、誰にもぶつけられないふんまんが沈澱している様子だ。

理由は言わずと知れた子弟教育の問題である。カナダの大都市では土曜日に集中授業する日本語補習校があり、父兄の要望を入れて年々充実してきている。だが、「カナチオン」の人達は共通して進学期の子供を持ち、日本の激烈な受験競争のもとではリスクをおかしてまでカナ

ダにつれてくるふんざりがつきかねるらしい。バンクーバーのBさんは「一度つれてきて暮してみたが、一週間に一回の授業で日本に追いつこうとする日本語学校の現状では、子供が帰国してから苦労すると判断して帰しました」と述べた。奥さんも子供さんもカナダの生活を楽しみ始め、友人も多くできかかっていたのに帰したのだという。

### カナダ特派員日記⑤

## 急増する “カナチオン”族

橋田忠明

見方によれば、仕事だけでなく、家族がカナダの人達の間まじって数年間過ごすことは何にも代えがたい人生体験と言える。カナダの子供達と一語に英語やフランス語で遊び遊ぶことは、子供たちにとっても日本では得られない無形の財産を得ることになる。実際の生活を通じて自然に国際感覚を培うこともできる。

「カナチオン」諸氏もこの点を十分に知っている。それだけに日々の煩惱もつめるようである。

トロントのCさんは「要は親の側がどちらを選択するかの決断でしょう。でも、先輩のケースや知り合いの同じような立場の人達の話聞くにつけ、子供たちをつれてくる勇気がでませんでした」と語っている。「カナチオン」諸氏の最高の楽しみは、一、二年に一回の日本出張と、夏休みに家族がカナダを訪ねてきて再会できる時だ。Cさんは会社を代表し、カナダ人従業員も多く擁するバリバリのヤリ手だが、家族との再会の時に必ず涙が出てきて止まらないと苦笑した。

フランス語圏のケベック州となると、もっと深刻である。州政府は言語法を着々と具体化し、日本人の駐在員子弟にまでその嵐は押し寄せている。言語法では最低六年間は条件つきで英語学校に通わせることを認めているが、このところ運用が厳しくなり、なかなか当局の認可が降りないらしい。そのため、内緒に頼み込んでモグリで英語学校に通わせるケースもでてくるが、特別扱いされ、成績表もでないそうだ。州政府に陳情したり、一方で全日制日本語学校の設立を検討しているが、子期したようにははかどっていないのが実情。

モントリオールのDさんは「郷に入るとは郷に従え、という諺もあるように、ケベック州の言い分はよく分ります。フランス語学校に行くと、子供のことでしから、すぐにフランス語にも慣れるでし

よう。が、日本に帰ってから問題が生じます。英語学校に執着するのはそのためです」と言う。「子供の教育のことを考え出すと、仕事の方も落ち着いて進められませんが」とDさんはつけ加えた。

あるパーティーで、親しい駐在員の奥さんから「独身やつれが何かしら見えるわヨ」とそつと忠告されたカナチオン氏もいる。「完璧にやっている積りでも、心の悩みは表に出るものです」と同氏は嘆いている。

モントリオールでは有志からなる「カナチオン会」が生まれた、との話を聞いた。集まったら十数人、それでなくともしだいに減り始めているモントリオール駐在員で単身赴任がこなないもいたか、と驚く。一か月に一度集まり、お互いの独身生活の悩みや日本での教育問題など日頃の心のわだかまりをぶちまけ合っているとのことである。

最近、日本でも海外子弟の受け入れ態勢が徐々に整いつつあるという。だが、私はカナダでの話からもっと主要な側面を心配する。「カナチオン」諸氏のカナダでの印象や日本との架け橋となる信念が崩れはしないか。カナダが家族第一主義の行きわたった国だけに、ことは深刻だとも言える。カナダ人の親友が、「カナダに暮す日本人の誰もが将来の日加交流を支える。外交官だ」と言った。子弟問題でカナダ・ファンが一人でも減るとすると、それは両国にとって座視できない事態だともみられるのだ。

（日本経済新聞トロント支局長）